

氏 名	浅 田 真 澄 あさ だ ま すみ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 115 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 12 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	人下顎骨切歯管の解剖学的研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 美濃口 玄

論 文 内 容 の 要 旨

幼年から成人に至る45の齶曝した下顎骨を研究材料とし、これについて歯の発育にともなう切歯部の骨質ならびに切歯管の発育状況を精細に観察した結果を要約すると次のとおりである。

1) 切歯管は下顎管が頤孔に開口する直前の反転部から始まり、その主流は内下方に前進して犬歯下に至り、それより漸次顎骨内板に接近しつつ中切歯と側切歯間の歯槽部の内板にある小孔(歯槽間孔 Foramina interalveolaria)に終っている。

しかしその経過状況は顎骨の発育、永久歯の成長ならびに頤孔の後方移動によって増齡的に変化するものである。

2) 5才頃の幼児の頤孔は骨体の中央高で第1乳臼歯下に位置し、その部の顎骨内部には犬歯歯胚が包蔵されている。

犬歯歯胚は切歯歯胚よりも下位に埋伏し顎骨下縁に近く増齡的にその発育端は頤孔よりますます下位となり骨体の下縁に接近してくるが、切歯の発育端は犬歯のそれよりも下降することなくかなり上位に留まっている。

切歯管は犬歯歯胚基底部の圧迫により下方に彎曲しているが、まだ骨体下縁との間には幾分間隙をのこし、近心からは骨管様細管を中切歯、側切歯歯胚間に上昇せしめている。

3) 頤孔は次第に後方へ移動し、犬歯歯胚との間に第1小臼歯歯胚が発育する。

9才頃の切歯管は犬歯歯根の発育にともなって圧下され顎骨下縁に密接するが、切歯の発育端部と顎骨下縁との間には間隙があり、これに向って切歯管が急に上昇している関係上この時期の切歯管は最も強い波濤状経過を示している。

4) 10才を過ぎる頃から犬歯は崩出の態勢をととのえ顎骨下縁との間が次第に離開するため、切歯管と顎骨下縁の間にも間隙を生じ、また犬歯歯胚を囲む緻密骨質の下壁と切歯管との間も分離するため切歯管の波濤状彎曲は緩慢になる。また第1小臼歯もすでに歯根の形成を開始しているが、その位置は切歯管よ

り内側にあるためこれによる管の圧下は認められない。したがってこの頃から切歯管はなんらの掣肘を受けることなく自由な経過をとるのである。

5) 以後各永久歯の萌出が進むにしたがって切歯管と各前歯の根尖とは次第に離れ、また顎骨下縁との間にも間隙を生じ、切歯管からは犬歯および第1小臼歯の根尖との間に骨性管が形成される。

6) 歯および顎骨の発育が完了すれば頤孔は骨体の中央においてほぼ第2小臼歯下に位置し、下顎本管より分岐した切歯管の彎曲も僅少となりつつ前方に下降して犬歯下に至り、犬歯根尖に向っては下顎本管と同程度の骨性管を分岐し、また中切歯、側切歯に対しても細小な骨管様の骨梁配置が認められる。しかし第1小臼歯根尖に連絡する骨性管は明瞭でない。

7) 切歯管の管壁は下顎管と同様にその起始部は完全な骨性管に近い構造を示しているが前方になるほど篩状多孔性となり、さらにその末端は毛様骨梁が集積している程度にすぎない。しかし下顎管に比較すると各部ともきわめて骨質が少なく、その顕著な場合には起始部からすでに篩状を呈し犬歯より前方は骨管というよりむしろ脈管を避けてその周囲に骨梁が配置している状態にすぎない。

8) しかし一般に起始部より犬歯下方までの切歯管は頤孔近くの下顎管より細小であるが骨管性状はむしろ完全である。これより切歯、犬歯および第1小臼歯の根尖にむかう脈管神経の導管は時として骨梁を欠き骨膜管状をなす場合がある。

論文審査の結果の要旨

下顎骨切歯管は下顎管が頤孔に開口する直前の反転部からはじまり、骨体中央から内側に接近しつつ正中近くにいたり、顎骨内面の歯槽部小孔すなわち歯槽間孔におわるものとされているが、本来下顎骨は、その発生、発育状況からみて骨体部、下顎枝、下顎骨切歯部にわけられるが、前二者にくらべて切歯部は著しくことなつた態度を示し、したがって従来発生学的の研究対象としてよく研究され、切歯管の発生も比較的よく研究されているが、生後の切歯管の発育および推移については解明されない点が多い。

著者は45例の幼年から老年にいたる下顎骨の材料について、切歯管の形態および経過を追究し、ことに歯牙発育期と完成後の変遷を研究した結果、いくたの新知見を得たが、とくに切歯管の経過が永久歯犬歯歯胚の発生および萌出によって大きな影響をうけること、切歯管の骨質性状もその発端部は完全な骨質管の性状を呈するが、末端部に近づくほど骨質は漸次菲薄となり骨細管状となること、切歯管本管と各前歯の根尖を連絡する副管は犬歯に向うものが最も著明で骨管性状を有し、第一小臼歯に至るものこれにつぎ、切歯に連るものはきわめて不明なことなどを明らかにした。

以上著者の研究は口腔解剖学上のみならず、口腔臨床上にも貴重な新知見を提供したもので、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。